

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた組織的な授業改善

～数学科の取組～

横浜国立大学教職大学院 教育学研究科高度教職実践専攻

久重路 麻美子

1. はじめに

次期学習指導要領が公示され、高等学校学習指導要領解説では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が述べられており、「学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化」する必要性が述べられている。教師は、「何を教えるか」という知識の質・量の改善に加え、「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視するとともに、「どのような力が身に付いたか」までを見据えた授業展開を考えることが大切になってくる。これは、一教員だけでなく、学校全体として取り組むことが必要である。神奈川県教育委員会も、組織的な授業改善の取組を全県で進めている。

2. 研究の目的

組織的な授業改善は手段であり、目的は「生徒の学力の育成」「資質・能力の育成」である。よい授業ができるかということだけではなく、「その時間の目標とする力が生徒に身に付いたか」という視点で授業づくりに取り組んでいくことが求められる。この実現のためには、教師が複数で「身に付けさせたい力」を確認し、単元目標や指導方法を共有することが求められる。

そのことから、本研究では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた、一教科(数学)で教科による授業づくりに取り組み、数学科教員の意識と生徒の変容を考察し、成果と課題を探ることとした。

3. 課題の解決方法

A高等学校の数学科(数学I)において取組を行った。単元指導計画を教科で作成し、「生徒に身に付けさせたい力」を担当者間で単元ごと、授業ごとに明確化し、共通理解を図った。作成する際には、「習得・活用・探究」の場面の設定をどの時間で作るかということも含めて検討・作成することで、単元を通しての目標の達成を目指した。

生徒の振り返りシート(学びの軌跡)においては、毎

授業ごとに書くことで、生徒が1時間ごと、単元ごとの目標を意識し、見通しをもって授業を受けられるようにし、授業ごとに振り返りを行い、身に付いた力を実感できるように工夫した。

また、研究授業を従来の1回だけでなく、2回行った。事前協議、実践、事後協議を行い単元指導計画の見直し・再検討を行うことで教科としての授業づくりを進めた。

また、組織的な授業改善には授業を見学あうことが必要であるため、授業見学月間を設定し、学年、教科の枠を超えて授業を気軽に見に行ける環境整備を行った。

4. 結果と考察

数学科の教員を対象に授業づくりに変化があったかのアンケートを実施した。目標を共有することで単元における身に付けさせたい力を意識した授業づくりができた。また、授業に対して自信をもつことができた教員もいた。生徒による授業評価をみても、昨年度と比較してすべての項目で上昇した。

学校全体としても、授業を積極的に見学する教員が増え、授業に関する話をする時間も増えたと感じている教員が多かった。

今後は、さらにこの取組を進め、どのように生徒の変容を把握していくかが課題である。また、それぞれの教科内だけではなく、教科横断的な視点で授業改善に取り組んでいく必要がある。各教科で身に付けさせたい力は何か、学校として育てたい生徒像は何か、他教科ではどのような学びをしているのかということを経験間で共有し、協働的な同僚性を高めていくことが必要である。そのためにも、授業をオープンにし、職員間のコミュニケーションを密にとり、実践していくことが必要である。

5. 主な参考文献

文部科学省(2018) 高等学校学習指導要領解説 総則編
神奈川県総合教育センター(2016) 高等学校における組織的な授業改善 「協働する授業づくり」ガイドブック